日本語史における漢文訓読の役割

—漢語の「為」と日本語の「ため」について—

于　日　平

On the function of the *Kanbunkundoku* in the History of Japanese Language Research

— The Chinese *Wei* "為" with a Comparison to the Japanese *Tame* —

YU Riping

在奈良•平安时代进行的古代汉籍解读中，日文的“ため”用于训读汉文的“为”字，其用法和“为”用法有很深的关系。但是，古代汉籍中的“为”字解释为“动机”，根据上下文既可以表示目的，也可以表示原因，而日本奈良•平安时代的“ため”只表示目的和利益，不表示原因。“ため”表示原因的用法始于室町时代，然后一直延续至今，而汉语则于近代，以“为”为核心，分化成表示原因的“因为”和表示目的的“为了”。

本文以日本奈良•平安时代和室町时代之间进行的汉籍训读资料为材料，尝试解释日文的“ため”原因用法的起源。并希望通过此研究，明确汉籍训读对日语、特别是日语文章体发展的影响，探讨中日文化交流的方式和各自的发展途径。

上代から古代漢文の漢字「為」に日本語の「ため」が当てられていたように、両者の間に深い関係があった。しかし、古代漢文では、「為」が「動機」と解釈されるなど、文脈によって目的にも原因にも使われていたが、日本の上代では、「ため」が目的・便益を表すだけで、原因を表す用法はなかったという。原因を表す「ため」用法は、室町時代になってから現れ、現代日本語に至っているのである。一方、漢語では、近代になって「為」を中心に、原因を表す「因為」と目的を表す「為了」に分離され、別々の表現となっている。

本論文は、日本の上代と室町時代の間に盛んに行われた漢文訓読に注目し、その資料を手がかりにして原因を表す「ため」用法の由来を探ることを目的とする。それを通じて、古代日本語、とりわけ古代の日本語文章語に対する漢文訓読の影響を検討し、中日文化交流の在り方やその後の独自の発展の道筋を示してみたい。

1．問題提起

現代日本語では、［ため］節が主文の出来事より以前になれば原因を表し、意図的な動作で以後になれば目的を表すということは、これまでたくさんの研究で言及されており、そのテンス関係の特徴や機能変化のメカニズムなどについて、于（1996）で詳しく分析されている。しかし、なぜ同じ形式で原因と目的の両方が表せるのかということについては、これまであまり検討されていないように思われる。

また、日本語の「ため」用法は、当て字に「為」が用いられていることから、中国古典の「為」の用法に関係があることは、誰でも想像ができるが、まだ明らかにされていない問題もある。まず、漢文訓読以前に「ため」という単語があったかどうか、あったとすれば、どんな意味を表していたかという語彙史の問題があり、それから、漢文訓読における用いられ方や漢文訓読によって意味的または機能的に変化が生じたかどうかという文化交流の問題もあろう。さらに、現代日本語では、「ため」は原因と目的の両方を表しているのに対して、漢語では、原因と目的が明確に分かれて、「因為」と「為了」という異なった形式によって示されるようになっている。

本稿では、古代から現代に至る日本語の「ため」用法と中国語の「為」用法の意味的変化の研究を通じて、上代・中世の漢文訓読に見られる中日文化交流の在り方や、さらに言語発展における各自の道筋を検討することにする。具体的には、２では、現代日本語の「ため」用法と現代中国語の「為」用法を比較研究し、両者の異同を明らかにする。３では、主に日本語の「ため」と漢文の「為」の対応関係を手がかりに、上代（奈良・平安前期）から中世（平安後期・室町時代）にかけて盛んに行われていた漢文訓読を紹介し、漢文訓読の日本語文章語に対する影響を検討する。４では、上代・中世の文献資料と現代語の使用実情をつき

合わせて、両言語が各自歩んできたであろう発展の道筋について私見を述べてみたい。

2．現代日本語の「ため」用法と現代中国語の「為」用法の比較

現代日本語では、「ため」が利益を表す名詞の用法があるほかに、［名詞＋の＋ため］節で形式名詞としての用法もあり、複文においては、［用言＋ため］節が原因と目的を表す従属節用法もある。一方、現代漢語では、書き言葉を中心に動詞の用法や受身文の動作主を表す連詞の用法が残っているが、原因と目的用法に関しては、「為」を中核に、原因を表す「因為」と目的を表す「為了」に分かれてきている。

以下では、主に原因と目的用法を検討することにする。2.1で、形式名詞と接続助詞的な機能を果たす日本語の「ため」用法を紹介し、2.2で、連詞と虚詞の機能を果たす中国語の「為」用法を紹介する。そして、2.3で、中日両言語の異同について分析してみることにする。

2. 1.　形式名詞と接続助詞的な機能を果たす日本語の「ため」用法について

ここでは、形式名詞とされる［名詞＋の＋ため］にある「ため」用法と、接続助詞的な機能を果たす［用言＋ため］にある「ため」用法を中心に、日本語の「ため」用法を分析してみたい。

2. 1. 1.　［名詞＋の＋ため］文について

［名詞＋の＋ため］節の機能は、基本的に主文より以前に位置づけられるか以後に位置づけられるかというテンス関係によって、原因と目的に分かれている。確かに、名詞の語彙的意味で原因しか表せないという単語（例えば、病気や地震など）があるが、それが非常に少なく、多くは、意味的に以前にも以後にも位置づけることができる単語である。

従って、主文が意志性のない結果・状態・性質を表すか意図的な意志動作を表すかは、原因か目的かを分ける判断基準になるが、主文が過去に起きた出来事を表す場合は、意図的な動作と動作の結果状態との両方に解釈されうるので、原因と目的の両方に解釈される可能性もある[1]。

①洪水のために、今年の稲の収穫は悪い。　　—原因—

②旅行のために、毎月少しずつ貯金をしたい。—目的—

③試験のために、昨日徹夜で復習した。　　—原因／目的—

2.1.2.［用言＋ため］文について

［用言＋ため］文では、基本的に［用言＋ため］節と主文の時間前後関係によって原因と目的が使い分けられている。つまり、［用言＋ため］節が主文より以前に起きれば原因になり、主文より以後に行われる意図的で一回的な動作であれば目的になるのである。そのテンス関係の顕在化に用言の語彙的意味、テンス・アスペクト・ボイスなどによる動詞の動作意図性の有無などが関わっており、また、［用言＋ため］節が中性になる時は、性質の異なる主文との呼応関係によって、その意味が決められることになる。

A）［用言＋ため］節が主文より以前か以後かのどちらかに位置づけられる表現

④客観的な流れに沿った論理展開であるため、順接接続を表す接続表現の「だから」や「したがって」などと一緒に使われることが多い。

［名詞＋である＋ため］原因文

1　認知論的に、発話時に原因と目的を区別しないという説も成り立つ。古代漢語における「動機」という概念に近づくことになる。

⑤裕亜（ひろあ）に限らず、島の出身の青年たちは料理がうまい。島に高校がないため、那覇を中心に沖縄各地の学校に進学する。

［形容詞＋ため］原因文

⑥建物の南北で地盤にかかる圧力バランスが崩れたため、建物の支柱が耐えられなくなり、倒壊を招いたという。［自動詞のタ形＋ため］原因文

⑦彼女は、この集会に参加したために、その夜何者かに殺されたのだ。

［他動詞のタ形＋ため］原因文

⑧人件費が高騰してチーム予算が圧迫されたため、93年度から外国人選手を締め出した。［他動詞の受身タ形＋ため］原因文

⑨日本語を勉強するために、日本留学を決めた。

［他動詞ル形＋ため］目的文

B）［用言＋ため］節が主文より以前か以後のどちらにも位置づけられる表現

主文より以前か以後のどちらにも位置づけられる表現が幾つかある。それは、いずれも複文における意味決定は従属節と主文が相互に影響しあって決められるものだと証明するものであろう。

⑩原子力の平和利用を促進するため、北、南、東、西、すべての加盟国の結束が必要だ。［従属節が目的指向が強い場合］

⑪これは論理的な筋道の帰結として出てきたものであって、そのことを示すために「わけだ」が用いられている。

［従属節が目的指向が強い場合］

⑫いちばんよくあるのは、糖衣錠というツルツルした錠剤ですが、これは単に飲みやすくするために、お砂糖でかためてあるのではありません。胃に入ってすぐにこわれないためにかためてあります。

［主文が目的指向が強い場合］

このように、複文における意味決定は、従属節と主文が互いに持ち前の特徴をもって相手に働きかけるという相互関係によって実現されるものであるが、プロトタイプの性格を典型的に持つ一方が強く働いて、もう一方の非典型性をカバーすることになるのである。つまり、[用言＋ため] 節が強く目的表現指向になれば、主文の意図的な動作性が弱くなっても、それを補うことができ、また、逆のことも言えるのである。

2. 2.　連詞と虚詞の機能を果たす中国語の「為」用法について

中国語の「為」には動詞としての用法があるが、ここでは、受身文で起因を表す連詞用法と、原因と目的を表す虚詞用法について検討する。2.1で行った日本語分析と同じように、構造的に［為＋名詞］にある「為」用法と［為＋謂語句］にある「為」用法に分けて分析することにする。

2. 2. 1.　[為＋名詞] 文について

現代漢語でも、書き言葉の固定用法として受身文で「為」が「所」と呼応して動作主と起因を表すことができる。

⑬为君子所不齿。　（君子に軽蔑される。）

⑭为私情所诱惑。　（私情のために惑われる。）

現代漢語では、原因と目的が明確に分かれているので、一般的に［因為＋名詞］が原因を、［為了＋名詞］が目的を表すことになっている。主文が［為＋名詞］節の意味決定に働きかける力が強く、未来指向的で意図性のある意志動詞の場合は、「因為」が用いられにくく、逆に過去・現在指向的で結果状態などを表す場合は、「為了」が使われないのが普通である[2]。また、［為＋名詞］節には、目的を表す用法が多く残っているが、それは書き言葉的で名詞との結合が非常に緊密な場合に使われる

という特徴がある。

⑮因为洪水、今年水稲的收成不好。

（洪水のため、今年の稲の収穫はよくない。）　［因為＋名詞］原因文

⑯为了旅行、我准备每月存一点儿钱。

（旅行のため、私は毎月少しずつ貯金します。）　［為了＋名詞］目的文

⑰为了父母，为了社会，为了自己的将来，一定要好好学习。

（両親のため、社会のため、また自分の将来のためにまじめに勉強すべきです。）　［為了＋名詞］目的文

⑰’？因为父母，因为社会，因为自己的将来，一定要好好学习。

主文が意図的な動作であっても、すでに発生した出来事や存在する状態を表すときは、従属節の名詞を原因にすることも、目的にすることもできるようになる。

⑱因为孩子，他放弃了现在的工能工作。

（子供のために、彼は今の仕事をやめた。）

⑲为了孩子，他放弃了现在的工能工作。

（子供のために、彼は今の仕事をやめた。）

2. 2. 2. ［為＋謂語句］文について

［為＋謂語句］文では、単語の語彙的意味やテンス・アスペクトによる意図的な動作性の有無が強く働いているため、以後に行われる意図的な動作でなければ目的表現になりにくいという文法制限は非常に厳しい。

---

2 このような意味分離のプロセスは非常に緩やかなもので、時には並行的に進められているものである。原因と目的がはっきりと意味的にも形式的にも区別され始めたのは、清朝の後期から白話運動が起こる五四運動の前後にかけてと言われているが、それも交互に用法の存在が見られている。魯迅や郁達夫など日本に長く留学した経験を持つ作家の作品には、「為了」が原因を表す用法が多く見かけられており、それは日本語の影響によるものだと指摘する人もいる。しかし、彼らの作品が人々に愛読され、意味も正しく読み取られていることを考えると、それなりの意味理解の素地があったのではないかと理解されよう。

現代漢語では、一般的に［因為＋謂語句］が原因を、［為了＋謂語句］が目的を表すことになっている。［為＋謂語句］節が目的を表す用法が残っているが、書き言葉的で「謂語句」との結合が緊密な場合が多い。

⑳因为年轻，我犯过很多错误。　（若いため、いろんな過ちを犯した。）

？为了年轻，我犯过很多错误。

㉑为了成功地举办这次晚会，我们做了很多准备工作。

（今回の夕べを成功裏に行うために、私たちは事前にいろいろな準備をした。）

㉒因为成功地举办了这次晚会，我们得到了学校的表扬。

（今回の夕べが成功裏に行われたため、私たちは学校から褒められた。）

㉓为考取名校而努力学习。

（名門校に入るために一生懸命に勉強している。）

しかし、［為了＋謂語句］節が表す意図的な動作が主文より以前にも以後にも位置づけられることがある。この場合は、主文の性格付けに大きくかかわっていることになろう。例えば、例㉔と㉕では、「我忙了整整一天」を意志的動作と解釈するか、結果状態と解釈するかによって、両方とも正しい使い方になる。

㉔为了接待客人，我忙了整整一天。

㉕因为接待客人，我忙了整整一天。

㉖因为要接待客人，我忙了整整一天。

2. 3.　中日両言語の異同について

主文が意図的な動作ですでに発生した出来事などを表す場合、［名詞の＋ため］が原因と目的の両方に解釈される可能性があるので、中国語の［因為＋名詞］と［為了＋名詞］の両方に訳されることがある。言い換えれば、同じ意図的な動作を引き起こすきっかけとして、原因も目的もありうるのである。中国語では、それを「動機付け」と説明している。

つまり、主文が意図的な動作の場合は、それを引き起こす動機付けが、原因の場合もあれば目的の場合もあるのである。この「動機付け」の概念で日本語の［名詞の＋ため］の機能も説明できるのではないかと思う。

また、用言が形容詞である時に、主文より以後に位置づけることができないので、基本的に原因表現になるということは、両言語において共通しているが、漢語の動詞否定形「不＋动词」用法は、日本語の動詞否定形よりも目的指向が強く、「因為」と共起する例が見当たらない。

㉗为了不迟到，我每天起得很早。

（遅刻しないために、私は毎日朝早く起きる。）

㉗’？因为不迟到，我每天起得很早。

さらに、日本語の動詞文では、ル形は以後指向、タ・テイル形は以前・同時指向、という性格をもつため、テンス・アスペクトの相違によって原因か目的かがはっきりと示されているが、中国語では、動詞が活用しないため、句単位で助動詞と一緒に見ないとテンス関係が判断できない。したがって、［為了＋動詞］が以後指向、［因為＋動詞］が以前指向、と結論すると同時に、以後か以前かに関わる助動詞との呼応も重要な働きをしているのである。

㉘因为（？为了）考上了名牌大学，我现在不怎么努力学习了。

（名門大学に入ったため、私は今あまりまじめに勉強しなくなった。）

㉙因为（？为了）事情已经发生，我只能这么做。

（ことはすでに発生したため、私はそうするよりしかたがなかった。）

3．上代・中世の漢文訓読による日本語文章語への影響

漢籍が大量に日本に入ってきたのは奈良時代から平安前期にかけてであると言われている。奈良時代までは、万葉仮名があったものの、漢文に対する（日本語的な）棒読みがほとんどであった。平安時代に入って

から、漢文に対する日本語的な読み下し（漢文訓読）が行われるにつれて、片仮名・平仮名が作り出されるようになり、そして、平安中期から後期にかけて、いろいろな書写法から漢語仮名混じり文という文章スタイルが選択され、日本語の文章構造が一応確立されていたと見て差し支えないであろう[3]。

史的に見れば、日本語文章語の確立過程は、漢文訓読が盛んに行われていた時期と重なり合っていることになる。漢文訓読は日本語文があってのことであることは言うまでもないが、一方、漢文訓読が日本語文の形成に影響を与えていたことも考えられよう。

３では、漢文の漢字「為」に日本語の「ため」が当てられていたという事実から、古代漢語の「為」用法と古代日本語の「ため」用法を比較検討することを通じて、日本語文章語に対する漢文訓読の影響を考えてみたい。まず、3.1では、古代漢文における「為」の用法を紹介する。それから、3.2では、上代から室町時代にかけての「ため」用法を紹介する。さらに、3.3では、平安中期から室町時代にかけての漢文訓読を資料に、その訓読方法を通じて「ため」と「為」の対応関係や意味変化を明らかにしてみたい。

3. 1.　漢文における「為」の用法

古代中国語では、「為」という単語が「４声」と「２声」の二通りに発音されていたという。４声に発音される「為」は、虚詞として使われて原因と目的の両方を表すことになり、２声に発音される「為」は、受身文で「所」と呼応して起因になる事柄や動作主を表したり、さらに本動詞として変化を示す「なる」や他動性意志動作「する」という（日本

3　日本語文章スタイルの確立過程については『日本語の歴史』（山口仲美2006　岩波新書）で詳しく述べられているので、ご参照ください。

語の「為す」に似ている）意味を表したりしていた。

「為」が４声に発音される時の用法：

㉚原因：為其老、強忍、下取履。　《史記・留侯世家》

（年よりであるがために、極力に（怒りを）堪えて、降りて靴を取ってあげる。）

㉛目的：天之生民、非為君也。　《荀子・大略》

（天が、君主のために、民を生んだのではない。）

「為」が２声に発音される時の用法：

㉜受身文の起因：為家室所累。　（家や家族のために煩われている。）

㉝受身文の動作主：挙天下之物，為我所用。

（天下の物は、私のために使われる。）[1]

㉞動詞「なる」：為人师表。　（人の手本となる。）

㉟動詞「する」：此非君子所为也。

（これは、決して君子が為すべき事にあらず／為すべからざる事なり。）

上記の分析で分かるように、原因と目的を表す虚詞用法は、同じく４声に発音されるもので、２声に発音される用法と異なっていた。現代語研究で言う原因と目的が同じ形式で表されていたということは、古代でその二つを統一させた上位概念があったと解釈すべきであろう。その上位概念とは、「動機付け」というもので、主文が意図的な動作を表す場合に、それを起こさせる動機を示すものである。つまり、原因も目的も動機付け的に働くことができるので、「為」という同じ形式で表されていたのである。

1　動作主を表す用法に対して、日本語では［ニ］と［タメニ］の二つが用いられうる場合がある。［タメニ］を使うと、動作主であると同時に原因であるというニュアンスになろう。［ニ］と［タメニ］の違いについては、今後の課題に譲りたい。

3. 2.　上代の「ため」用法と室町時代の「ため」用法について

漢文訓読資料より以前の上代（奈良時代を中心とする時代）に「ため」が使われた文献があった。『時代別　国語大辞典・上代編』（三省堂）の「ため」項目（p.448）では、万葉集に使われいた「ため」の意味を説明し、次のような用例が挙げられている。

「ため」［為］（名）目的・便益などを表す形式名詞。……結果を示す故（ゆえ）と明らかな区別がある。

㊱難波潟潮干のなごりよく見てむ家なる妹が待ち問はむ多米（ため）
（万976）

㊲振り立つる耳のいや高に天の下を知ろし食さむ事の志（シルシ）の太米（ため）　（祝詞出雲国造神賀詞）

㊳萱（ワスレ）草吾が紐につく香具山のふりにし里を忘れむが為（ため）
（万334）

㊴君が為（ため）手力（タチカラ）つかれ織りたる衣服ぞ
（万1281）（p.448）

四例とも形式名詞として使われたもので、目的を表しているという。接続法として、「タメは用言に接して二つの句をつなぐ場合と、ノ・ガを介して体言に続く場合とがある。前者ではタメに上位することがらの実現を目的として、下位することがらが先ず実現することを表し、後者は、タメに続いて表現されることがらの恩恵を蒙るのが、タメに上位する名詞であることを示す。」（p.448）上記の例文で言うと、用言に接する例は「動詞む＋ため」の㊱と「動詞む＋が＋ため」の㊳で、体言に続く例は「名詞の＋ため」の㊲と「名詞が＋ため」の㊴、ということになる。意味的には、目的は利益になるものが多いので、便益と通じていると言えよう。

上代では、理由を表す用法として「ゆえ」があるので、「……ユエの

上の体言がきっかけとなって、下のことがらが実現に至るという（ため用法と一筆者）逆の関係を表す。したがって、理由を表すタメの用い方は上代にみられない。」(p.448)[5]と説明されている。3.2.で紹介したように、上代の日本文献では、「ため」に「為」字を宛てたほかに、「多米」「太米」という万葉仮名が使われていたが、「故」という漢字が当てられた例が見つからない。また、上代用法が残る一部の漢文訓読資料にも、それらしい用法がないということである。つまり、上代では、原因は「ゆえ」、目的や便益は「ため」という使い分けがあったのではないかと考えられよう。

時代がくだって、室町時代（明徳３年（1392年）の南北朝合一から、天正１年（1573年）第15代将軍義昭が織田信長に追われるまでの180年間）になると、「ため」用法には原因・理由を表す用法が現れてきたという。『時代別　国語大辞典　室町時代編』の「ため」項目によれば、目的と便宜を表す用法のほかに、「④当面する事態の、直接の要因となるものであることを示す」という用法があり、次のような例が示されている。

㊵コハ何ナル我身ナレバ、元弘ノ初ハ、武家ノタメニ隠レ身…帰洛ノ今ハ、一生ノ楽末一日終、為（メニ）讒臣被レ罪、刑戮ノ中ニハ苦ムラント　（太平記　十二、兵部卿親王流刑事）

㊶恋はただ身をつらかれのしわざにて、こころぞ人のためにくるしき　（三島千句四）

㊷容隠（の）輩、隠田之族、為（ために）罪科可レ注進交名

上記の紹介で分かるように、上代の日本語文献にはなかった「ため」

5　同辞典の「ユエ」項目にも同じような記述があった。
「形式名詞タメは、後世、目的のほかに原因を表す用い方をもつが、当時は原因にはユエを用い、タメを用いなかった。」(p.790)

原因用法が室町時代に現れてきたということである。このような「ため」用法の拡張は、どのように発生、発展、定着したのであろうか。次に、上代と室町時代の間に行われた漢文訓読を資料に、日本語の「ため」用法の変化について考えてみたい。

3. 3.　漢文訓読に見られる「ため」用法について

築島裕氏の『訓点語彙集成』（汲古書院）によれば、「訓点記入は、先づ仏教関係の典籍から始められたと考えられるのであり、平安時代初期九世紀には、中国本来の「漢籍」の類には、訓点が存在したといふ確かな徴證は、未だ発見されていない。「漢籍」の訓点記入が始まったのは、現存の確実な資料によると、平安時代中期十世紀の初頭以降のことであるらしい。」（p.8）と資料の時代位置づけを明確にし、「本邦に伝来していた漢籍の中には、先秦時代の漢文から、唐時代の俗語を含んだ文体など、種々の異なった性格の文体があったようであるし、又、「仏典」の漢文には、印度の言語から翻訳された訳文が多かったから、中国本来の漢文とは違った語彙や語法があったと見られるが、古代の日本人が、種々の漢文に接して、初めてそれらを訓読する際に、これらの文体の時代的相違などを顧慮せず、一律に解して、訓読した時点における国語の語彙、語法を使用して、漢字漢文を訓読することが原則であったと考えられる。」（p.8）と訓読資料に使われた日本語の時代性格が指摘されている。

漢文に使われた原因表現には、「故（ゆえ）」と「由・因・縁（よし）」「所以（ゆえん）」もあるが、『訓点語彙集成』によれば、「故（ゆえ）」「由・因・縁（よし）」「所以（ゆえん）」「為」のそれぞれの漢字に宛てる日本語読みが基本的に決まっており、「為」に「ゆえ」「よし」「ゆえん」を宛てて読ませた実例は見つからない。ところが、四者の共起関係

については、「故縁（ゆえよし）」「所以～故」があるほかに、「為」が「故」と一緒に使われることで原因を表す（動詞の用法があったが）という用例は、「故」の項目で多く見つかっていた。

古代中国の文献（例えば、『史記』や『文選』『古文尚書』『文集（白氏文集）』など）では、「為」が目的にも原因にも使われていたということは、3.1ですでに説明した。しかし、仏典資料を除き[6]、「「漢籍」の訓点記入が始まったのは、現存の確実な資料によると、平安時代中期十世紀の初頭以降のことであるらしい」（『訓点語彙集成』p.8）というので、上代では、漢語の「為」原因用法と日本語の「ため」用法が完全に対応していなかったことになろう。漢文訓読資料は、上代と室町時代の間に現れたもので、漢文に現れる「為」用法と当時の日本語の「ため」用法との対応関係を示す絶好の対照資料となり、室町時代に現れてきた「ため」原因用法を説明するきっかけを示してくれるのではないかと考えられる。

次は、漢文に現れた［為＋名詞］に対する訓読み方を調べることによって、「為」が当時の日本語でどのように訓読されていたのか、特に原因を表す「為」がどのように訓読されていたのかを分析し、その用法拡張の経緯を探ってみることにする[7]。

---

6 「仏典関係では、既に奈良時代に多数の佛書が伝来しており、それらに基づいて多くの撰述書が現れた。その中には、中国で製作、乃至は漢訳された仏典についての注釈書はもとより、日本の学僧が自らの研学による成果としての、日本独特の研究成果である佛書も含まれている。この事実は、漢文の訓点の面でも、根本的な相違を生み出した基となっている。」『訓点語彙集成』p.10

7 漢文に使われる［為＋動詞句］に対して、当時どのように日本語に訓読されていたのかをも調べる必要があるが、日本語の「タ」形や「テイル」形が明確な形で存在したかどうかは不明であり、また中国語の「了」や「過」に対して、異なったテンス・アスペクトの形で訓読させていたという確証は持てない。

3. 3. 1. 『訓点語彙集成』の「為」項目に宛てた「ため」訓読みについて

ところが、『訓点語彙集成』の「為」項に記載された251用例（「為」一字だけの用例３を含めて）では、「に／となる」「として～する」「する」といった動詞の使い方が絶対多数を占めており、238例であった。そのほかは、目的を表す虚詞用法と受身文の連詞用法となり、明確に原因を表す用例が見つからなかった。

目的用例（７例）

㊸為（タラム／ラムコトヲ）咒之所供養（する）『文集』

受身文の用例（６例）

㊹為（タリトイフハ）諸佛（ノ）之所（ロ）□□□称歓（シタマフ）

しかし、中国古典の『史記』にも『白氏文集』にも、原因を表す［為＋名詞］用法があったが、訓点資料に検索例が上がっていないのが不思議でならない。この『訓点語彙集成』の収集資料に用例がなかったのか、それとも「為」の原因用法に訓点が施されていなかったのか、今のところよく分からない。原文に直接当たるか、もっと多くの訓点資料を調べるか、しなければならないが、今回はそれを直接に確かめることができなかった。

ただし、意味的には、［名詞の＋ため］節で表す目的は、主文が意図的な動作か結果状態かによって決められる性格をもつもので、主文の意味合いが変われば、［名詞の＋ため］節の機能も変わる可能性が十分あること、また、受身文で［名詞の＋ため］節によって示される動作主明示は、［名詞＋に］による動作主明示と異なり、「目的」と「動作主」の両方が混合した概念であり、それが、主文の意味合い変化に応じて機能が変わるきっかけを作っておいた可能性もあるのではないかと考えられる。

3. 3. 2. 『訓点語彙集成』の「故」項目に現れる「為～故」用法について

『訓点語彙集成』の「故」項目に、「所以」「因」との共起使用があるほか、「為」と一緒になって原因を表す用例が25例あった。漢語の古典文法では、「為～故」が共起関係を形成する連詞とみなされ、構文的に［～為故］と［為～故］の二つの形があり、［故～］と異なった原因表現とされていた。意味的には、現代語に訳すと、「～が原因である」「ほかでもなく、～がその原因である」となろう。

この［～為故］と［為～故］に対する訓読みは、「よる」という訓読みをつけたのが一例あるのを除き、24例は全部「ため」（振り仮名を付けたものもあれば付けなかったものもあるが）と読ませていたようである。

㊺為（の）欲（（おもほ）すか）故になり　08305001－⑩206-17
㊻為（の）除滅（せむか）…故（（ゆえ）に）『医心方』
㊼為（の）…故（なり）『医心方』
㊽為（ノ）…故（に）　08305011－107-7, 159-3
㊾為（ノ）…故（ユエニ／に）　10505024-36オ2, 43オ6
㊿為（の）故に　10820003－②646
(51)（の）為（の）故なり　10820003－②349

例㊻㊼㊽㊾に対して、「～のため、～がゆえ」と訓読みさせているように、「ため」が目的、「ゆえ」が原因という理解が成り立つが、㊺㊿(51)に対しては、どのように読ませて解釈されていたのであろうか。漢文用法で理解すると、㊺は「～が欲のためにあり」、㊿は「～ため／ゆえになり」、(51)は「～ため／ゆえなり」となるだろう。しかし、概念的には、目的・便益と原因が溶け合って一つの概念を形成し、しかも日本語の文末という同じ位置で表しているということは考えられないと思う。したがって、［目的＋原因］を表す組み合わせを除き、［為～故］構文も［～

為故］構文も同じく原因を表す表現であるので、日本語訓読みされているうちに、目的・便益を現さない文頭の「ため」が欠落したり、特に例㊿㊿㊶が示すように、「ため」か「ゆえ」か一つだけあれば機能が果たせたという訓読み方が現れてくる可能性が大いにある。それが、後に原因を表す「ため」用法の発生を可能にしたのではないかと思う。

よって、室町時代に現れてきた「ため」原因用法の由来を下記のような仮説を立てて説明したい。

仮説：原因を表す［為～故］構文に対する訓読、特に［～為故］に対する訓読によって次第に「ゆえ」に取って代わり、「ため」の原因用法が生まれてきた可能性が高い。そして、語彙的意味やテンス・アスペクトの相違によって次第に目的と原因の機能分離が明確になり、現在に至ったのである。

４．両言語における各自の発展の道のり

３では、上代の日本語では、「ため」が目的と便益を表す形式名詞で、原因を表す用法がなかった。それが、室町時代になって、受身文で動作主を表す用法や原因を表す用法が現れ、現代日本語に至っているという意味拡大のプロセスを説明した。受身文の動作主明示用法は漢文訓読の影響を受けて現れたものという指摘があったが、原因用法の発生と定着を示す確かな資料およびそれについての分析は、これまでまだ指摘されていない。室町時代までの間に盛んに行われた漢文訓読を示す漢文訓点資料は、まさにそれを明らかにする絶好の資料になろう。

一方、中国の古典には、先秦の諸氏文献や漢代の『史記』などに見られるように、すでに原因と目的の両方を表す用例があった。それが、現代になって、「為」を中心に、原因を表す「因為」と目的を表す「為了」に分かれるようになっているが、［為＋名詞］節に限って言えば、主文

が意図的な動作を表す場合は、依然として「動機付け」という上位概念が働いて、原因と目的の両方に解釈されることが可能になる。「動機付け」は、主文が示す意思的な動作を起こさせる起因を示すもので、主文より以前か以後かによって原因と目的に下位分類されるが、［為＋動詞句］従属節は、主文との時間関係をテンス・アスペクト的に明記されている場合が多いので、両方の解釈が取れることを難しくしているのであろう。それで、［因為＋動詞句］か［為了＋動詞句］かの選択使用がより明確な形で求められているのだと考えられる。

このように、これまで行われてきた中国語の「為」と日本語の「ため」の比較に基づき、両言語の歴史的な文化交流と現代に至るまでの発展の道のりについて、次のようにまとめることができるのではないかと考える。

A）中国古典では、「為」は、原因と目的の両方を表すことができた。特に、主文が意図的な動作を表す場合、「動機付け」という上位概念によって原因と目的が統一されており、動作を起こさせる起因の働きをしていた。それが、［為＋名詞］節に特に顕著に現れていた[8]。また、［為～故］のような連詞的用法や［～為故］のような固定用法があり、両者が呼応したり融合したりして原因を表していた。

B）後に、「為」を中心に、原因の「因為」と目的の「為了」に分離されるが、従属節と主文の時間関係を軸に、二つの表現はつながっているのである。したがって、時間関係を大事にする［為＋動詞句］文では、

8　黎錦熙と刘世儒の共著『中国現代文法』1985では、目的と原因の区別について次のように述べられている。
「「因为」「由于」などは、因果関係表出の介詞用法の拡張であり、「为了」「为着」などは、目的関係表出の介詞用法の拡張である。前者を、因果関係文とし、後者を、目的関係文と呼ぶ。」（p.63）さらに、その両者の連続性と相違点については、
「このような連詞（日本語の接続助詞に当たる－筆者－）は、昔は互いに通用していたが、……最近になって、各自が発展し、次第に分かれていったのである。」（p.64）

その使い分けが非常に忠実に守られており、［為＋名詞］節をもつ文では、両者の混同がよく起こる。

C）日本語の「ため」は、上代では、目的と便益を表していたが、室町時代になると、新たに原因と受身の動作主を表す用法が現れ、特に受身の動作主を表す「ために」用法は、主文が意図的な動作か結果状態かによって目的と起因の両方に解釈される可能性がある。また、漢文訓読資料には、［～為故］例文があるが、それに対する訓読み方として、日本語文末に「ため＋ゆえ」読みが考えられず、一方が消える可能性が大きい。さらに、名詞に続く「ため」用法が時々［名詞＋の／が＋ため］の形を取るが、それが、［名詞＋が＋ゆえ］と非常に似ているので、後になって起因を表す用法に変わっていったのではないかという可能性も存在すると考えられよう。

D）現代日本語では、「ため」は目的を表す表現としてよく使われている一方、原因表現としても、出来事の継起発生に従う客観表現や原因に重点が置かれる表現などとして、原因・理由を表す「ので」「から」と使い分けられている。特に、［名詞の＋ため］節は、［名詞な＋ので］［名詞だ＋から］と異なり、話し手の心的態度を含まない客観的な起因表現や起因に重点が置かれる表現としてよく使われているのである。

㊷うそをついたために、会社に首になった。

㊸病気のため、会社を三日間休んだ。

しかし、未解決問題や課題なども多く含まれている。例えば、漢文訓読は歴史的に上代と室町時代の間に入る形になっており、訓読の結果として日本語の文章語形成に影響が出ることが予想されうるが、その影響はどんなものであろうか。また、影響するに当たり、時代背景や漢文に対する取り上げ方と理解の仕方、当時の日本語による訓読の仕方など、様々な要素が働いていると考えられるが、これらの問題はどのように絡

み合って互いに影響しあっているのであろうか。「為」と「ため」の比較研究は、このような面白くて大きな問題を端的に示していると同時に、問題の奥深さや資料の足りなさをも教えてくれている。いずれも今後の課題にしたい。

主な参考文献：

『時代別　国語大辞典　上代編』三省堂

『時代別　国語大辞典　室町時代』三省堂

築島　裕　平成19年『訓点語彙集成』第一巻　汲古書院

平成20年『訓点語彙集成』第五巻　汲古書院

平成21年『訓点語彙集成』第八巻　汲古書院

山口仲美　2006.5『日本語の歴史』岩波新書（新赤版）1018　岩波書店

黎錦熙・刘世儒共著　1985『中国現代文法』商務印書館

于日平　1996.2「「ために」の意味表出と構文的特徴－複文に見られる時間関係と意志性について」『日本語と日本文学』第22号　筑波大学国語国文学

1999.6「原因表現と目的表現の連続と区別」『漢日語言研究文集２』北京出版社

2000.5『原因･理由･目的表現の相関性についての研究－［タメニ］［ノデ］［カラ］［ヨウニ］を中心に－』世界知識出版社